

築館町文化財調査報告書第19集

伊治城跡

—平成16年度：第30次発掘調査報告書—

平成17年2月

宮城県築館町教育委員会

伊治城跡

—平成 16 年度：第 30 次発掘調査報告書—

平成 17 年 2 月

宮城県築館町教育委員会

序

築館町には、先人の残した数多くの歴史的文化遺産があります。現在生活している我々に課せられた使命は、現代に続く歴史的文化遺産の保護、活用に取り組み、未来に受け継いでいくことであります。

伊治城跡は、昭和 52 年より 3 年間、宮城県多賀城跡調査研究所が、続いて築館町教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、有力な擬定地であった城生野地区において発掘調査を進めてまいりました。その結果、平成 3 年度の発掘調査においては、ついに中枢部の政庁を確認するに至りました。その後も伊治城跡の規模・構造を解明するために調査を続けております。平成 10 年度の調査では、古代の最強兵器である「弩」が発見され、古代東北における対蝦夷政策の重要な拠点であったことが裏付けられ、古代東北の激動の歴史を現代に伝える貴重な遺跡であることが改めて認識されました。

そして、平成 15 年 8 月 27 日には、かねてから念願でありました伊治城跡の国史跡指定が、地域の方々のご理解、ご協力のもと正式に指定されました。今年度からは 2 カ年の予定で、保存管理計画策定事業が始まり、史跡の整備活用の指針となる計画を作成しているところであります。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、協力いただきました土地所有者をはじめ城生野地区の方々に深く感謝申し上げます。また、調査に指導・協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課には深く感謝申し上げます。

平成 17 年 2 月

築館町教育委員会

教育長 久我 竹五郎

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成16年度発掘調査（第30次調査）の成果をまとめたものである。
2. 調査は、国庫補助事業にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。
3. 調査時における地区割りは、城生野分館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0.0）とし、この点と「原点2」と結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は、 $2^{\circ} 7' 9''$ 西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1 X=−136,867.547 Y=17,758.857 （世界測地系—TKY2JGDにより変換）
原点2 X=−136,864.350 Y=17,845.295 （世界測地系—TKY2JGDにより変換）

平面図中の地区割り：S-20、E-20などの表記は、それぞれの基準点から南に20m、東に20mの位置にあることを示している。
4. 本遺跡の位置を示した地形図（図2）は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」、「築館」を使用して作製した。
5. 土色の記載は「新版標準十色帳」（1973）にもとづいた。
6. 本書の作成は築館町教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課が担当し、担当者の協議を経て三浦実が編集・執筆した。
7. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。

小井川和夫、阿部恵、古川一明、天野順陽（宮城県多賀城跡調査研究所）
佐川正敏（東北学院大学文学部教授）、進藤秋輝（宮城県考古学会会長）
8. 本遺跡では、遺構に種類ごとの略号と検出順の番号を付している。種類ごとの略号は以下のとおりである。

建物跡=S B、堅穴住居跡、堅穴遺構=S I、土取り跡など=S X、溝=S D、土坑=S K
9. 発掘調査の記録や出土品は築館町教育委員会が一括して保管している。
10. なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書については、本文の後の付表1にまとめて示している。

目 次

序

例 言

目 次・調査要項

I.	遺跡の位置と地理的環境	1
II.	遺跡の概要	1
III.	遺跡周辺の歴史的環境	2
IV.	調査の目的	2
V.	発見された遺構と遺物	5
VI.	考察	10

伊治城跡発掘調査報告書一覧・参考文献

付表 1. 伊治城跡発掘調査一覧

付表 2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

写真図版

報告書抄録

調査要項

1. 遺 跡 名 伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2. 所 在 地 宮城県栗原郡築館町城生野
3. 調査主体 築館町教育委員会
4. 調査担当 築館町教育委員会文化財保護対策室 千葉 長彦 三浦 実
5. 調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 後藤 秀一 須田 良平
大和 幸生
6. 調査期間 平成 16 年 11 月 1 日～12 月 10 日
7. 調査面積 約 450 m²

I. 遺跡の位置と地理的環境

伊治城跡は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形をみると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山脈が南北に走り、中央部を北上川が南流している。西側の奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの丘陵に分岐している。そのうち、最も北側にある築館丘陵は江合川と迫川に挟まれており、丘陵端部ではさらに多くの小丘陵に分かれている。

遺跡は標高 20~27m ほどの小丘陵東端部に続く河川段丘に立地しており、北側は二迫川、南側から東側にかけては迫川、西側は北から入り込む沢によって囲まれている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果や地形から、およそ東西 700m、南北 900m ほどと考えられる。

II. 遺跡の概要

伊治城は、8世紀後半から9世紀初頭にかけて律令政府が東北地方經營のために設置した城柵の一つである。奈良・平安時代の政治・軍事の中心地である陸奥国府多賀城と、平安時代に鎮守府が置かれた胆沢城とのほぼ中間に位置している。また、桃生城と共に設置年代が明らかな城柵としても知られていた。その所在地については多くの論考があり、本地区も有力な候補地の一つであった。この間の詳しい研究史については、「伊治城跡 I」(宮城県多賀城跡調査研究所: 1978) を参照していただきたい。

昭和 52 年から 3 年間にわたる宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査や、昭和 62 年からの築館町教育委員会・宮城県教育委員会による発掘調査で、本遺跡が伊治城跡であることが明らかとなった(付表 1)。土塁等と大溝による外郭区画施設を周囲に

巡らし、その内部の南に偏った部分に東西約 185m、南北約 245m の規模で平行四辺形に築地堀で区画したとみられる内郭を配していること、内郭の中央に東西 55m、南北 60m の規模で方形に築地堀を巡らせた政府が存在することが明らかになった。政庁には正殿を中心として脇殿や後殿、前殿などが配置されており、大別して 3 時期の変遷があり、2 時期目は火災にあっている。内郭は建物を主体とした官衙ブロックで構成されている。とくに北西部には、創建期に桁行 5 間の建物 6 棟以上が南に開く「コ」字型配置をとる官衙ブロックが置かれていた。外郭は、およそ内郭北辺を境に 2 分され、南は建物・堅穴住居などで構成されており、一方伊治城全体からみて 2/3 以上を占める北部では、今まで堅穴住居跡だけが発見されている。

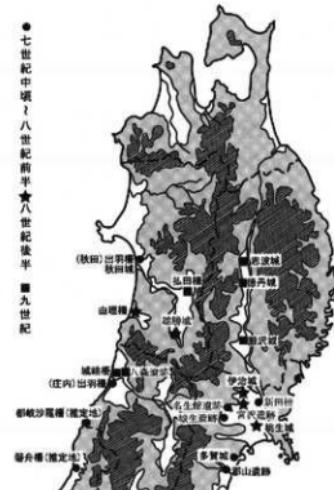


図 1 東日本の古代城柵 (進藤 1991一部改変)

遺物で特筆されるものとしては、日本で初めて出土した弓の一種である「弩」の一部「機」がある（第25次調査）。

平成15年8月27日には内郭城を含む約94,000m²が国史跡に指定された。これを受け、今年度から、保存管理計画の策定を2ヵ年で行う予定であり、今年度は地形図作成（図12）を行った。

III. 遺跡周辺の歴史的環境

このことについては、「伊治城跡・嘉倉貝塚」（築館町教委：2002）で詳述しており、参照していただきたい。以下は、伊治城と同時代の奈良・平安時代の周辺の遺跡を概観したものである。

伊治城の北西約6kmの丘陵上には、蘇手刀などが発見された33基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群がある（東北学院大学考古研：1972）。また、伊治城から北東約2kmには大沢横穴墓群や姉歯横穴墓群があり、伊治城を含む周辺一帯の支配者層の墓と考えられる。北方約3kmには『吾妻鏡』に登場する栗原寺跡と推定されている地点があり、古代末の造構・出土遺物が未確認ながらも、10世紀前半頃の池跡や平安時代中期以降の礎石建物跡が発見されており（栗原寺調査団：1963）、付近からは仏像が見つかっている。

発掘調査された集落跡には、築館町佐内屋敷遺跡（宮城県教委：1983）、原田遺跡（宮城県教委：1980、2005）、嘉倉貝塚（宮城県教委：2003）、下萩沢遺跡（宮城県教委：2005）、志波姫町御駒堂遺跡（宮城県教委：1982）、宇南遺跡（宮城県教委：1980）、大門遺跡（宮城県教委：1980）、糠塚遺跡（宮城県教委：1978）、金成町佐野遺跡（宮城県教委：1980）、栗駒町長者原遺跡（栗駒町教委：1995）などがある。このうち、糠塚遺跡は伊治城の東方5kmにあり、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式土器の基準資料となっている。一方、南方2.5kmにある御駒堂遺跡では、奈良・平安時代の造構・遺物の他に、8世紀前半頃の関東地方からの人間の移住が想定されるような上器や住居構造が明らかにされており、伊治城成立以前の栗原地方の動向を考える上で注目される。2004年に調査が行われた原田・下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見された。原田遺跡では、集落の周囲に材木塀を巡らせていた可能性が指摘されており、また下萩沢遺跡では建物の方向を揃えて計画的に配置された建物群がみられ、他の集落とは異なる様相を示していることから、伊治城との関わりが考えられる。

生産遺跡では、西方4kmにある須恵器を焼いた築館町岩ノ沢窯跡や東方4kmにある須恵器を焼いた志波姫町狐塚遺跡、北方6kmにある須恵器や瓦を焼いた金成町小迫神社窯跡があげられ、製品が伊治城に供給されていた可能性が考えられる。

IV. 調査の目的

伊治城跡の発掘調査は政府の検出を主眼に実施してきたが、平成3・4年度の調査で政府の規模や建物配置などがほぼ解明されたため、平成5年度以降からは内郭と外郭の区画施設および両地区的官衙ブロックの構造と変遷の把握を目的に調査を実施している。昨年度より台地縁辺部に想定される外郭南辺区画施設の解明を目的として調査を実施しており、その結果、昨年度の第29次調査で外郭南門跡と考えられる掘立柱建物跡（SB610）を発見した。また、七坑内から版築土の塊を検出したことか

ら、外郭南辺区画施設は築地塀と想定された。以上の成果を踏まえ、本年度は築地塀の検出を目的に昨年度の調査区の西側を対象に発掘調査を実施した。(図3)



図2 伊治城跡と周辺の地形



今回の調査区（第30次）

これまでの調査区

----- 外郭推定線

①～③次：宮城県多賀城跡調査研究所

1～30次：築館町教育委員会

（調査の概要是付表1を参照）

図3 調査区と周辺の地形

V. 発見した遺構と遺物

今回の調査で、検出した遺構は掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡2軒、土取りによる溝状遺構2、整地2、上坑2基、溝跡2条などである。遺物は、土師器、須恵器、平瓦、鉄製品など整理用コンテナで3箱出土している。ほとんどが小破片である。なお基本層序は以下のとおりである。

I層：表土（水田耕作土）

II層：暗褐色土（水田床土：褐色土ブロックを含む） - 調査区全体に広がる。

III層：暗褐色土 - 部分的に確認できる。旧表土。

IV層：明褐色土 - 地山面。遺構確認面である。

*表土から遺構確認面までは約30cmである。

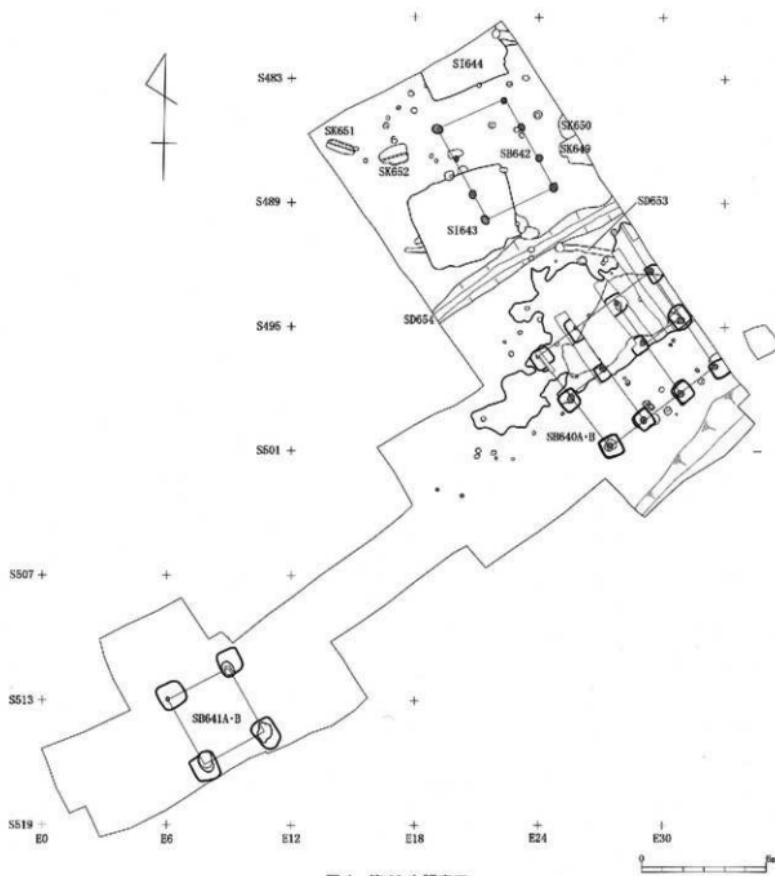


図4 第30次調査区

1. 堀立柱建物跡

(1) SB640A・B 外郭南門跡

調査区の東南部の迫川へ下る急斜面際の地山面及びSX648 整地層の上面で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟総柱建物跡である。同位置で一度建替えられている(A→B)。柱穴はすべて確認している。

平面規模は、桁行が南妻で総長6.58m、柱間寸法が西側より2.17m、2.26m、2.15mである。梁行が西妻で総長5.8m、柱間寸法が南から3.11m、2.69mである。方向は西妻で測ると北で約40° 東へ偏する。

側柱の柱穴は一辺0.8~1.2mの方形を呈し、深さは確認面から四隅の柱穴で1.4~1.0mと深く、それ以外が0.8~1.0mである。棟通下柱列の中央の2本の柱穴は側柱より小さく、一辺約0.8mの方形を呈し、深さは約0.4mと浅い。9ヶ所で柱の切り取り痕跡が確認でき、断ち割った6ヶ所の内4ヶ所で腐食により細くなった柱材が残存していた。柱痕跡は径約40cmである。埋土は、上部が褐色シルトを主体とする層で、下部になると地山ブロック、白色粘土ブロックを含む褐色粘土質シルトを主体とする層となる。残存していた柱材付近はグライ化が進んでいる。

S640 A外郭南門跡は、S640Bの柱穴によって壊されているため詳細は不明だが、同位置での建替えと考えられる。このことからS640B外郭南門跡とほぼ同規模であると見られる。

遺物は、掘方埋土からロクロ調整の土師器壺・甕、非ロクロ調整の土師器壺・甕、須恵器壺、須恵器蓋等が出土している。いずれも小破片で図示できるものはない。

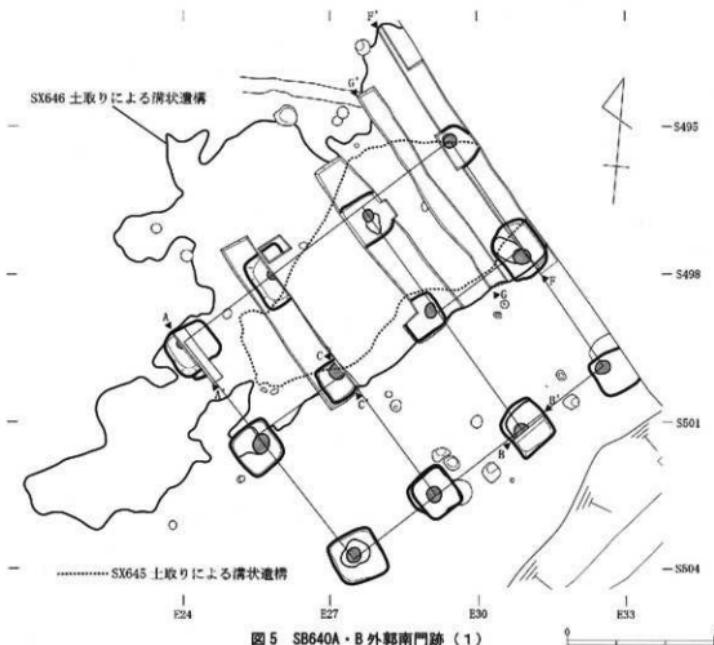


図5 SB640A・B 外郭南門跡(1)

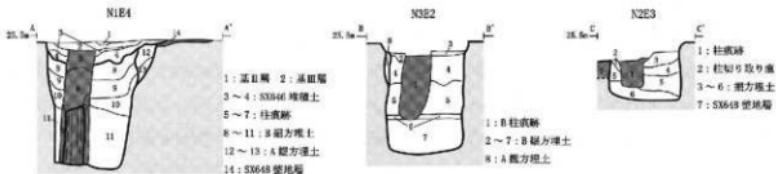


図 6 SB640A・B 外郭南門跡 (2)

(2) SB641A・B 檻跡

調査区の南西部の地山面で検出した南北1間、東西1間の掘立柱建物跡で、外郭想定線上に位置していることから檻跡と考えられる。後世の開田のために大きく削平されている。同位置で一度建替えられている (A→B)。柱穴はすべて確認している。

SB641B 檻跡の平面規模は、南北約3.3m、東西約3.0mである。方向は西側を測ると北で約30° 東へ偏する。柱穴はSB641A 檻跡の柱抜取穴を利用しており、長径80~90cm、短径40~50cmの不整な楕円形を呈している。3ヶ所で柱の抜き取りを確認している。北西柱穴では、腐食して細くなった柱材が径20cm、長さ60cmで残存していた。深さは確認面から60cm程度である。埋土は褐色粘土質シルトを主体としている。北西柱穴では、柱材の周囲約20cmはグライ化が進み、白色化している。

SB641A 檻跡は、SB641B 檻跡と規模・方向は同じと見られる。柱穴は、一边が1.2~1.5mの方形を呈している。深さは確認面から60cm程度である。埋土は褐色粘土質シルトを主体としている。

遺物は、掘方埋土より土師器の小破片が1点出土しているが、小破片で摩滅しており詳細は不明である。

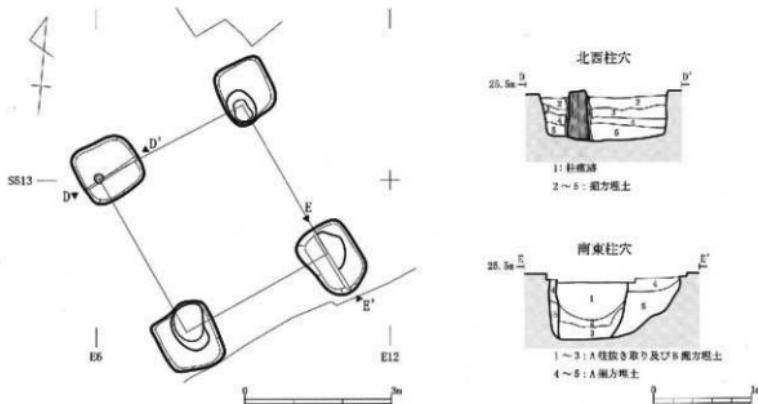


図 7 SB641A・B 檻跡

(3) SB642 堀立柱建物跡

調査区の北部で検出した桁行3間、梁行1間の南北棟建物である。SI643 積穴住居より新しい。柱穴はすべて確認し、柱痕跡は2ヶ所で確認している。平面での確認のみで精査は行っていない。

平面規模は、桁行が東妻で総長4.95m、柱間寸法は1.65m等間、梁行が南妻で3.5mである。方向は東側柱列で測ると、北で約30°西へ偏する。

柱痕跡は径15cmで、堆積土は炭化物を含む暗褐色土である。柱穴は一辺25~40cmの円形で、深さは断ち割りを行っていないため不明である。埋土は地山ブロックを含む暗褐色土である。

2. 溝状遺構

(1) SX645 溝状遺構

SB640 外郭南門跡に伴うSX648 整地層を掘り込んでいる。東西7.5m以上、南北3.8mの東西方向の溝状を呈し、調査区の東へ延びる。南側はSX648 整地層を急角度で掘り下げ、北側は徐々に浅くなり、壁際で急に立ち上がる。深さは南側が50cm、北側が10cmで西側は後世の削平のため浅くなる。底面には褐色土が自然堆積しているが、上部はSX647 整地層によって埋め戻されている。遺物は自然堆積層から上師器壙、須恵器壙が出土しているが、小破片で摩滅しており詳細は不明である。

(2) SX646 溝状遺構

SB640 外郭南門跡に伴うSX648 整地層より古い。地山を掘り込んでいる。東西11.5m以上、南北6.0mの不整形な溝状を呈し、調査区の東へ延びる。南側は地山を急角度で掘り下げている。北側は徐々に浅くなりながら段状になり、壁際で急に立ち上がる。深さは南側が45cm、北側が10cmで西側は後世の削平のため浅くなる。底面には褐色土が自然堆積しているが、上部はSB640 外郭南門跡に伴うSX648 整地層によって埋め戻されている。遺物は土師器壙、須恵器壙、円面鏡の破片(図11)が出土している。ほとんどが小破片であり、図示できた円面鏡以外の詳細は不明である。

3. 整地層

SB640 外郭南門跡より新しいSX647 整地層と、SB640A 外郭南門跡に伴うSX648 整地層を確認している。

(1) SX647 整地層

東西6.5m以上、南北2.0mの範囲に分布し、調査区の東へ延びる。厚さは最大で約30cmである。SX645 佔取による溝状遺構を埋め戻している。2層に細分でき、上層は白色粘土をブロック状に含み、下層は地山粒や炭粒を含む褐色土である。整地層の上面には灰白色火山灰が堆積している。遺物はクロ調整の土師器壙(図11)のほか須恵器壙、瓦の小破片が出土している。須恵器壙の底部切り離し技法はヘラ切りである。

(2) SX648 整地層

東西7.5m以上、南北6.0mの範囲に分布し、調査区の東へ延びる。厚さは最大で約20cmである。

褐色土に地山ブロックを多量に含む層で SX646 土取りによる溝状造構は埋め戻している。遺物は須恵器蓋(図 11)のほかクロ調整の土師器壺・甕、非クロ調整の上師器壺、須恵器甕の小破片が少量出土している。

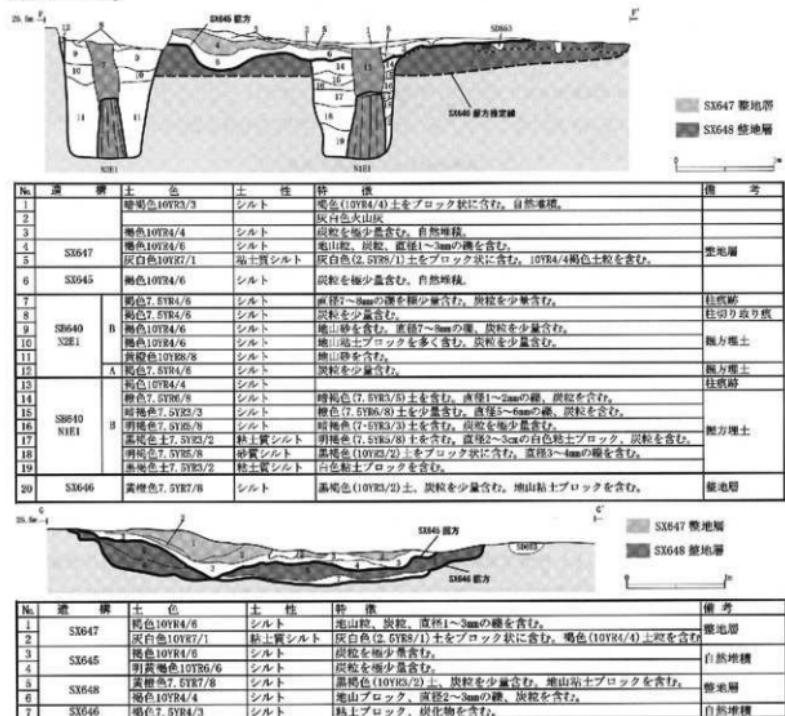


図 8 SX645・646 溝状造構断面図

4. 壇穴住居跡

調査区中央やや北よりで 1 軒 (SI643)、調査区北端で 1 軒 (SI644) 検出した。いずれも平面確認にとどめている。

SI643 壇穴住居跡は、東西 5.0m、南北 4.2m の隅丸方形である。SB642 捩立柱建物跡と重複しこれより古い。方向は北辺で見ると東に 12° 北に偏する。カマドの位置は不明である。住居南辺部中央付近の堆積土中に 70 cm × 40 cm の範囲で焼土ブロックが確認できた。堆積土は地山ブロック混じりの人为堆積と考えられる。

SI644 壇穴住居跡は調査区北端で一部を検出した。北半分が調査区外にある。平面規模は東西 4.0 m、南北 2.3 m 以上である。方向は南辺でみると、東に 12° 北に偏する。カマドは東辺で一部を検出し、残りは調査区外に伸び一度造り替えられている。

VI. 考 察

今回の調査は、台地の南縁辺部に想定される築地塀の検出とその規模・構造・年代の解明を目的として実施した。調査では築地塀本体を検出することはできなかったが、SB640 外郭南門跡、SB641 構状建物跡の他、SB640 の建築に伴う SX648 整地層、土取りによるとみられる SX645・646 溝状造構の他、竪穴住居跡や小規模な柱穴の SB642 なども発見している。以下、これらの遺構について、造構期の設定とその変遷・年代について検討する。

1. 造構期の設定とその変遷・年代

(1) 造構の変遷

確認した造構については、重複関係により次のような変遷が認められた。

- ・ SX646 → 自然堆積層 → SX648 整地層 → SB640A → SB640B → SX645 → SX647 整地層 → 灰白色火山灰などの自然堆積層
- ・ SI643 → SB642

以上の他に、主な造構として調査区南西隅部で SB641 を発見している。

(2) 造構期の設定とその変遷

① SB640 外郭南門跡と SX648 整地層について

SB640 は、桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟総柱建物跡で、同位置で一度建替えられている (A→B)。桁行中央間が広いこと、また、棟通り中央間の 2 つの柱穴が他と比較して小規模で深さも浅いこと (宮城県多賀城跡調査研究所: 1994、盛岡市教委 2003)、そして外郭南辺区画施設の存在が想定される位置にあることから、SB640 は、すぐ南側が迫川へ下る急斜面ではあるが、正面 3 間、奥行 2 間の伊治城の外郭南門と考えられる。

SX648 整地層は、SX646 溝状造構の窪みの中の自然堆積層上にみられた整地層である。すなわち、SX648 は SX646 が一定期間自然堆積で埋没した後に行われた整地で、同位置に SB640 が建てられていることから、SB640 の建築に必要な平坦面を造成するためのものであると捉えることができる。

以上より、SB640 と SX648 は重複して SX648 → SB640 という新旧関係にあるが、これは南門造営の工程差と捉えられる。

② SX645・SX646 溝状造構について

SX646・SX645 はともに SB640 南門跡と重複し、SX646 は SB640 よりも古く、SX645 は新しい溝状の掘り込みである。両造構は、SB640 の北半分と重複し、台地の南縁辺にはほぼ平行して東西に続いている。

平面形は、南側がほぼ一直線状をなすが、北側は不規則である。南側では急角度で深く掘り込まれ、底面には凹凸があり、北側に向かって徐々に浅くなる。掘り込みの中には自然堆積層が認められ、新しい SX645 の堆積土およびその上の SX647 整地層の上には灰白色火山灰が堆積している。

このような特徴を有する溝状の掘り込みは、これまでの外郭南辺や西辺、東辺を対象にした発掘調

査でも確認しており、外郭区画施設構築のための土取り跡と推定されてきている（築教委：1996、1997、1998、1999）。したがって、本地区においてもSB640 外郭南門の造営前後の時期に、それぞれ外郭区画施設の存在が想定される。以上より、本調査区で発見した遺構は、次のような3時期の遺構期として捉えられる。

A期：SB640 外郭南門が造営される前で、SX646 槽状遺構から外郭区画施設の存在が想定される時期

↓区画施設の崩壊

B期：SX648 整地を伴い、SB640 外郭南門（一度建て替え）が造営された時期

↓建物廃絶

C期：SB640 外郭南門が廃絶し、SX645 槽状遺構、SX647 整地層から外郭区画施設の存在が想定される時期

↓区画施設の崩壊（SX645 の自然堆積）

灰白色火山灰

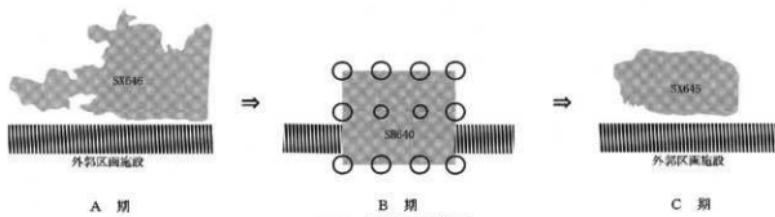


図9 遺構変遷模式図

③その他の遺構

SB641

SB641は東西、南北とも1間の小規模な建物で、一度同規模で建替えられている。SB640、SX646・645の位置と方向から想定される築地塀の西延長線上に位置している。区画施設と重複し、桁行・梁行とともに1間の建物は、多賀城跡や各地の城柵遺跡で外郭区画施設に付設されていることが知られており、それらは槽状の建物と考えられている（宮城県多賀城跡調査研究所：1994）。このことから、SX641についても、築地本体の痕跡は発見できなかったが、築地塀の存在を想定し槽状建物跡と考えておきたい。

SB642

SB642は、竪穴住居跡より新しく、これまでの調査成果からみれば、伊治城存続期の遺構ではなく、伊治城以後の古代以降のものである可能性が考えられる。

SI643・644

堅穴住居跡は SI643・644 の 2 軒発見している。このうち SI643 は堆積層の特徴から埋め戻されないと見られる。両堅穴住居の性格については、SB640 との位置関係から門の機能時に門と併存した可能性は低いと推測されるため、築地塀や門の造営に關係した人々の住居跡の可能性が考えられる。

(3) 遺構期の年代

これまで検討してきた SB640、641、SX647、648、SX645、646 は灰白色火山灰層の存在からいずれも古代のものであることは間違いない、遺構の性格からみて伊治城に關連する遺構である。しかし、確認調査のため遺構から出土した遺物が少なく、まとまった資料もないため遺物から遺構期の年代を確實にすることはできなかった。特徴が把握できた遺物としては、SX645 を埋め戻している SX647 整地層から出土したロクロ調整土師器の甕がある。このことから、SX645 は、およそ 9 世紀代から 10 世紀前半にかけて埋没しているといえるから、C 期の想定される築地塀の年代も同様の頃と考えられる。

2. 外郭南辺区画施設について

今回の調査においても、昨年度の調査と同様に外郭区画施設本体を検出することはできなかった。これは、後世の削平のためと考えられる。

昨年度の外郭南辺中央部を対象にした第 29 次調査では、土取り跡と考えた上坑 2 基の自然堆積層中から版築状の堆積が認められる土塊を 2 個体発見した。

このような版築状の堆積が認められる土塊は、政庁地区の調査においても発見されている。政庁の南辺区画施設は、区画施設基底部の整地層が確認され、南辺区画施設に伴う外側の溝の堆積層中から版築状の堆積が認められる土塊が出土したことから、築地塀であったと考えている（築教委：1993）。

以上のことから、今回の調査においても区画施設本体の検出はできなかったが、SX645・646 土取り跡から想定される伊治城の外郭南辺区画施設は、地形にあわせるように台地南縁に沿って構築されており、築地塀で区画されていた時期があったものと考えられる。

SB640 外郭南門へ想定される区画施設の取り付け状況は、区画施設に係わる遺構を発見していないため判然としないのが現状である。しかし、A 期（SX646）と C 期（SX645）において想定される区画施設は、ほぼ同位置に構築されていたと考えられる。このことから、両時期の間にある外郭南門が造営された B 期においても、区画施設の位置を大きく変えているという可能性は低いと考えられる。この仮定が成立するならば、想定される区画施設は、外郭南門の棟通柱筋を中心取り付くのではなく、東西両妻の南半部に取り付いていたと考えられる。

なお、SX645（C 期）は底面に自然堆積層があり、その上に SX647 整地層が堆積している。このことから、区画施設構築後に、SX645 はある程度開口した状態にあり、その後整地地業が行われたことになる。この整地地業が開口部を埋めるためのものか、区画施設に係るものなのかは今回の調査では明らかにできなかった。

VII.まとめ

1. 今回の調査（第30次）では、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡2軒、十取りによる溝状遺構2、整地2、土坑2基、溝跡2条などを検出した。
2. 調査目的である第29次調査の成果より想定される築地塀の本体は確認できなかったが、外郭南門跡と横跡、区画施設構築に関わる土取りによる溝状遺構を発見したことにより、予想される台地縁辺部に区画施設の存在を想定することができた。
3. 外郭南門跡（2時期）→区画施設の変遷が確認できた。遺物から、新しい時期（C期）の区画施設の年代は概ね9世紀代と考えられる。
4. 外郭南門跡は一貫して本地区に存在していないことから時期によって位置を変えていた可能性が高い。
5. 今回の調査成果を基に以下に今後の検討課題を記す
 - ・外郭区画施設本体の確認
 - ・29次調査で発見されたSB610外郭南門跡と今回発見されたSB640外郭南門跡との時期的関係
 - ・外郭南門跡から内郭域へのルートの確認
 - ・外郭南門跡と政庁の変遷との対応関係
 - ・丘陵南部縁辺部に外郭南門跡が発見されたことから、追川を挟んで南側の地区的状況の確認

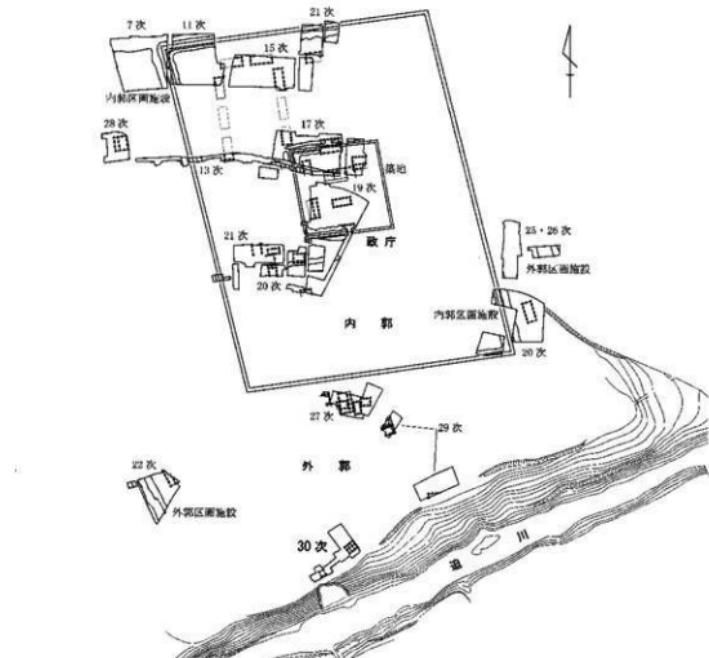
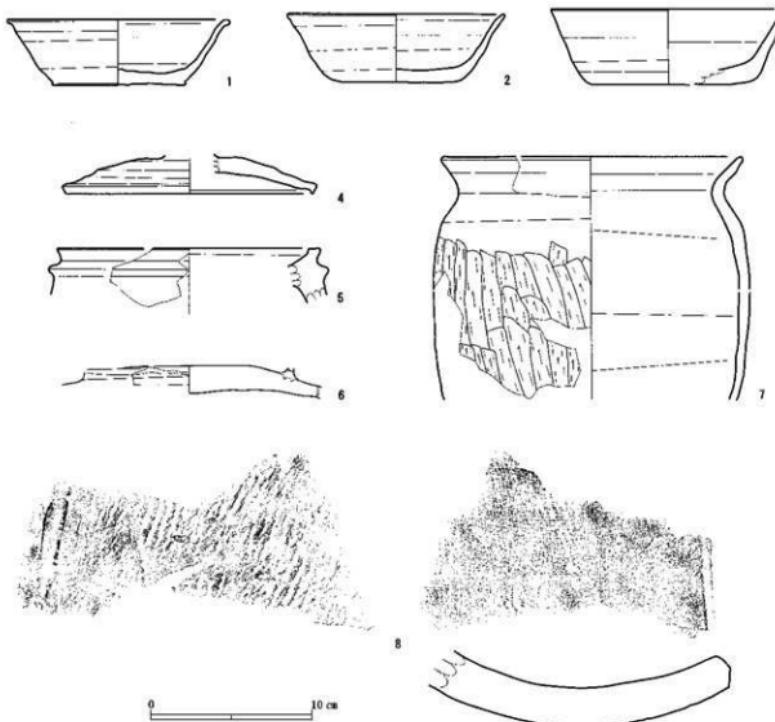


図10 政庁・内郭・外郭南辺遺構模式図



No.	器種	出土地点	残存	寸法(cm)			特徴	写真図版
				口径	底径	器高		
1	須恵器 环	遺構確認面	1/4	(13.7)	(8.2)	4.1	内・外：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	4
2	須恵器 环	遺構確認面	1/2	13.4	7.7	4.2	内・外：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	4
3	須恵器 环	遺構確認面	1/4	(14.5)	(10.4)	4.7	内・外：ロクロナデ	4
4	須恵器 盖	S X 645整地層	1/4	15.1	-	(2.2)	内・外：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	4
5	円面鏡	S X 646堆積上	-	-	-	(3.7)	-	4
6	円面鏡	遺構確認面	-	-	-	(1.8)	内・外：ロクロナデ 接合比縫	4
7	七輪器 壺	S X 647整地層	-	18.6	-	(15.0)	外：口縁部ロクロナデ 体部ケズリ 内：ロクロナデ	4
8	平瓦	遺構確認面	-	-	-	-	凸面：網叩き目 陰面：布目痕→ナデ 側面：ケズリ	4

図11 出土遺物

伊治城跡発掘調査報告書一覧

- (1) 宮城県多賀城跡調査研究会 1978 「伊治城跡Ⅰ・昭和 53 年度発掘調査報告」 『多賀城跡発掘調査報告書第 3 冊
- (2) 宮城県多賀城跡調査研究会 1979 「伊治城跡Ⅱ・昭和 53 年度発掘調査報告」 『多賀城跡発掘調査報告書第 4 冊
- (3) 宮城県多賀城跡調査研究会 1980 「伊治城跡Ⅲ・昭和 54 年度発掘調査報告」 『多賀城跡発掘調査報告書第 5 冊
- (4) 築館町教育委員会 1988 「伊治城跡・昭和 62 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 1 冊
- (5) 築館町教育委員会 1989 「伊治城跡・昭和 63 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 2 冊
- (6) 築館町教育委員会 1990 「伊治城跡・平成元年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 3 冊
- (7) 築館町教育委員会 1991 「伊治城跡・平成 2 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 4 冊
- (8) 築館町教育委員会 1992 「伊治城跡・平成 3 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 5 冊
- (9) 築館町教育委員会 1993 「伊治城跡・平成 4 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 6 冊
- (10) 築館町教育委員会 1994 「伊治城跡・平成 5 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 7 冊
- (11) 築館町教育委員会 1995 「伊治城跡・平成 6 年度発掘調査概報」 『築館町文化財調査報告書第 8 冊
- (12) 築館町教育委員会 1996 「伊治城跡・平成 7 年度・第 22 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 9 冊
- (13) 築館町教育委員会 1997 「伊治城跡・平成 8 年度・第 23 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 10 冊
- (14) 築館町教育委員会 1998 「伊治城跡・平成 9 年度・第 24 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 11 冊
- (15) 築館町教育委員会 1999 「伊治城跡・平成 10 年度・第 25 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 12 冊
- (16) 築館町教育委員会 2000 「伊治城跡・平成 11 年度・第 26 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 13 冊
- (17) 築館町教育委員会 2001 「伊治城跡・平成 12 年度・第 27 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 14 冊
- (18) 築館町教育委員会 2002 「伊治城跡・喜倉口塚」 『築館町文化財調査報告書第 15 冊
- (19) 築館町教育委員会 2004 「伊治城跡・平成 15 年度・第 29 次発掘調査報告書」 『築館町文化財調査報告書第 17 冊

引用・参考文献

- 栗駒町教育委員会 1995 :「長者原遺跡」栗駒町文化財調査報告書第 3 集
進藤秋輝 1991 :「古代城壁の設置とその意義」「北からの視点」日本考古学協会 1991 年度宮城・仙台大会資料集 pp. 131~142
東北学院大学考古学研究部 1972 :「鳥ヶ崎古墳群発掘調査概報」『證故』第 7 号
宮城県教育委員会 1978 :「篠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書第 53 号 pp. 44~198
宮城県教育委員会 1980 :「原田遺跡」『東北日動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 63 号 pp. 109~123
宮城県教育委員会 1980b :「宇南遺跡」『東北日動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 69 号 pp. 501~556
宮城県教育委員会 1980c :「大門遺跡」『東北新幹線開通調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 62 号 pp. 273~306
宮城県教育委員会 1980d :「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 63 号 pp. 425~546
宮城県教育委員会 1982 :「御室堂遺跡」『東北自動車道道路調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 83 号 pp. 307~584
宮城県教育委員会 1983 :「佐内塙遺跡」『東北自動車道道路調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第 93 号 pp. 289~546
宮城県教育委員会 1988 :「宮城県遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第 176 号
宮城県教育委員会 2005 :「下萩沢遺跡、原田遺跡調査成果の概要」『第 31 回古代城柵官道跡跡検討会資料集』
宮城県多賀城跡調査研究会 1994 :「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』
盛岡市教育委員会 2003 :「志波城跡・平成 11~14 年度発掘調査概報」
栗原守調査団 1963 :「栗原寺の諸問題」『栗原町史』追録第 2 号 pp. 1135~1147

付表1 伊治城跡の発掘調査

◎多賀城跡調査研究所による調査

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文獻
昭和 51 年度 (1976)	地形同測量(航空測量) 現地踏査・研究史整理				
昭和 52 年度 (1977)	①外郭北辺区域施設発掘調査	168 m ²	7/4~8/3	大溝 1、土塁 1、土塁状遺構 1	(1)
	外郭北辺区域調査	270 m ²		施設整作跡 1、埴輪上器「城崩」。	
昭和 53 年度 (1978)	②外郭北辺区域調査	780 m ²	7/3~8/4	掘立柱建物 1、堅穴住居 4	(2)
	外郭西辺区域施設発掘調査		11/11~11/13		
昭和 54 年度 (1979)	③外郭北部発掘調査	1,000 m ²	10/29~12/4	掘立柱建物 2、堅穴住居 17	(3)

◎築館町教育委員会・宮城県教育委員会による調査

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文獻
昭和 62 年度 (1987)	1. 墓道整備	220 m ²	7/1~8/12	堅穴住居 5 (鏡頭 1)	(4)
	2. 墓道支所修繕	160 m ²	7/4~7/18	堅穴住居 1	
	3. 個人住宅便橋取付	2 m ²	8/5		
	4. 水道管理設	1,250 m ²	9/1~9/14	堅穴住居 8	
	5. 墓道整備	1,080 m ²	1/18~2/9	堅穴住居 7	
	6. 青苔除築	80 m ²	2/25		
昭和 63 年度 (1988)	7. 国庫補助事業	1,500 m ²	7/1~10/30	内郭外溝、堅穴住居 2	(5)
	8. 水道管理設	142 m ²	11/4~11/24	外郭東辺大溝? 堅穴住居 3	
	9. 墓道整備	504 m ²	2/6~2/12		
平成元年度 (1989)	10. 宅地現状変更	480 m ²	4/11~6/1	掘立柱建物 1、堅穴住居 9、土器埋設 1	(6)
	11. 国庫補助事業	1,200 m ²	7/21~11/22	[内郭北辺] 古墳施設・外溝、掘立柱建物 3、堅穴住居 10	
	12. 逃学路整備	1,700 m ²	9/5~9/16	外郭北辺大溝、古墳前期巴館区画線	
	13. 猛進整備	1,960 m ²	10/16~11/20	内郭区画施設・外溝、[或引] 正殿、北面建物	
	14. 水道管理設	170 m ²	11/29~12/8	堅穴住居 7	
平成 2 年度 (1990)	15. 国庫補助事業	900 m ²	9/3~9/29	[内郭北辺] 掘立柱建物 3、堅穴住居 8	(7)
	16. 道路整備 (大連線)	1,320 m ²	9/27~10/5	外郭東辺大溝? [外郭北辺] 堅穴住居 16	
平成 3 年度 (1991)	17. 国庫補助事業	1,300 m ²	5/27~7/16	[或引] 正殿、北殿、北面建物、北東建物、東北建物、堀地	(8)
	18. 個人住宅	300 m ²	11/19~12/2	古墳前期馬頭	
平成 4 年度 (1992)	19. 国庫補助事業	1,300 m ²	5/11~7/4	[或引] 正殿、南殿、西脇殿、土塁場、南門、築堤 [内郭南西] 駿河? 墓道? 掘立柱建物 2、堅穴住居 1	(9)
	20. 西廄補助事業	1,500 m ²	10/4~11/18	[内郭南東] 墓道? 掘立柱建物 5、堅穴住居 2 [内郭南東] 古墳施設・外溝、掘立柱建物 1、堅穴住居 5	
平成 6 年度 (1994)	21. 西廄補助事業	820 m ²	10/3~11/27	[内郭北辺] 古墳施設、掘立柱建物 1、堅穴住居 9 [内郭南東] 掘立柱建物 5、堅穴住居 3	(11)
	22. 国庫補助事業	1,140 m ²	10/5~11/14	[内郭北辺] 墓道? 掘立柱建物 1 [外郭南西] 古墳施設・外溝、堅穴住居 5 [外郭南西] 古墳施設・外溝、大溝、掘立柱建物 1 [外郭南西] 古墳施設・外溝、堅穴住居 3	
平成 8 年度 (1996)	23. 国庫補助事業	450 m ²	10/7~11/7	[外郭北辺] 古墳施設・大溝	(13)
	24. 国庫補助事業	480 m ²	10/6~11/7	[外郭北辺] 土塁、大溝、堅穴住居 1	
平成 9 年度 (1997)	25. 国庫補助事業	450 m ²	10/23~11/13	[外郭北辺] 古墳施設・大溝	(15)
	26. 国庫補助事業	200 m ²	11/8~11/22	[内郭南東] 古墳施設・大溝	
平成 10 年度 (1998)	27. 国庫補助事業	500 m ²	10/18~11/8	[外郭南東] 古墳施設 2、堅穴住居 8 [外郭南東] 堅穴住居 12、等「通」郵便	(16)
	28. 国庫補助事業	400 m ²	11/5~11/15	[外郭南東] 掘立柱建物 13	
平成 15 年度 (2003)	29. 国庫補助事業	500 m ²	10/3~11/6	[外郭南東] 掘立柱建物、印石器	(18)
	30. 西廄補助事業	450 m ²	11/1~12/10	[外郭南東] [外郭南東] 墓道? 横跡	
平成 16 年度 (2004)					本書

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

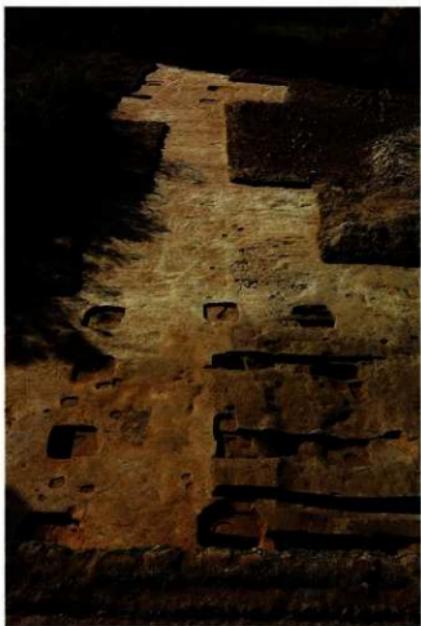
西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営に携わった鎮守府將軍田中多太麻呂 らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う	統日本紀
768	2	12. 融奥や他国百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる	統日本紀
769	3	1. 伊治・桃生2城への移民を確保するため、優遇することを定める 2. 板東8国から伊治・桃生2城へ移住する人々を募集する 6. 陸奥国に栗原郡を置く。これはもと伊治城である(統日本紀では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる)	統日本紀 統日本紀
780	宝亀11	6. 陸奥国伊治村に浮浪人2,500余人を移住させる 2. 陸奥国の申請により、胆沢の地を征圧するために覚驚城を造営することとする 3. 上治郡大領伊治公皆麻呂は按察使紀広純、牡鹿郡の大領道嶋大 橋を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府軍の物をとり放火する	統日本紀 統日本紀 統日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢公阿奴志巳らは帰服したいが伊治村の浮に妨げ られて果たせないでいることを訴える	類聚国史 卷190
796	15	11. 陸奥国伊治城と下造塞の中間に駅を置く 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住 民9,000人を伊治城に移住させる	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅を置く	日本後紀
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥州の民が動搖し、栗原・賀美両郡の 百姓多く逃亡する。	統日本後紀
905	延喜5	延喜式 ○神名式 陸奥國100座 栗原郡7座大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 雄鏡神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 遠流志別石神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 ...志太、栗原、磐井... ○兵部式 陸奥国駄馬 ...玉造、栗原、磐井...各5疋 和名類聚抄 陸奥國 栗原郡(久利波良) (郷名)栗原・清水・仲村・会津	延喜式
931 ~ 938	承半年間		和名類聚抄



図12 伊治城跡地形図（平成16年度作成）



30次調査区全景（右上が北）



SB640 外郭南門跡—SB641 槛跡 (E→W)

写真図版 1



SX646 西壁断面 (N→S)

SX645 断面 (NW→SE)



SB640 外郭南門跡 (NW→SE)



SB640 外郭南門跡柱穴 (N1E1) 断面



写真図版 2

SB640 外郭南門跡柱穴 (N2E3)



SB640 外郭南門跡柱穴 (N2E1)

線はSX646掘方



SB641 棚跡 (N→S)



写真図版 3



SB641 檻跡南東柱穴



SB641 檻跡北西柱穴



写真図版 4

報告書抄録

ふりがな	いじじょうあと							
書名	伊治城跡							
副書名	平成16年度伊治城跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	築館町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	千葉 長彦・三浦 実							
編集機関	築館町教育委員会							
所在地	〒987-2293 宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7番1号 TEL 0228-22-1125							
発行年月日	西暦 2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査面積 m ²	調査原因
伊治城跡	宮城県 栗原郡 築館町 字城生野	市町村 045217	遺跡番号 41007	38度 45分 50秒	141度 02分 40秒	20041101 ～ 20041210	450	重要遺跡 範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伊治城跡	城柵跡	奈良～ 平安時代	掘立柱建物跡 土取りによる溝状 遺構	土師器 須恵器			外郭南辺部にお いて外郭南門跡と 櫓跡を発見した。	

築館町文化財調査報告書 第19集

伊治城跡

印 刷 平成 17 年 2 月 15 日
発 行 平成 17 年 2 月 25 日

発行 築館町教育委員会
〒987-2293
宮城県栗原郡築館町菜師一丁目 7-1
TEL0228-22-1125

印 刷 川嶋印刷株式会社
岩手県一関市上大根街 3-11

